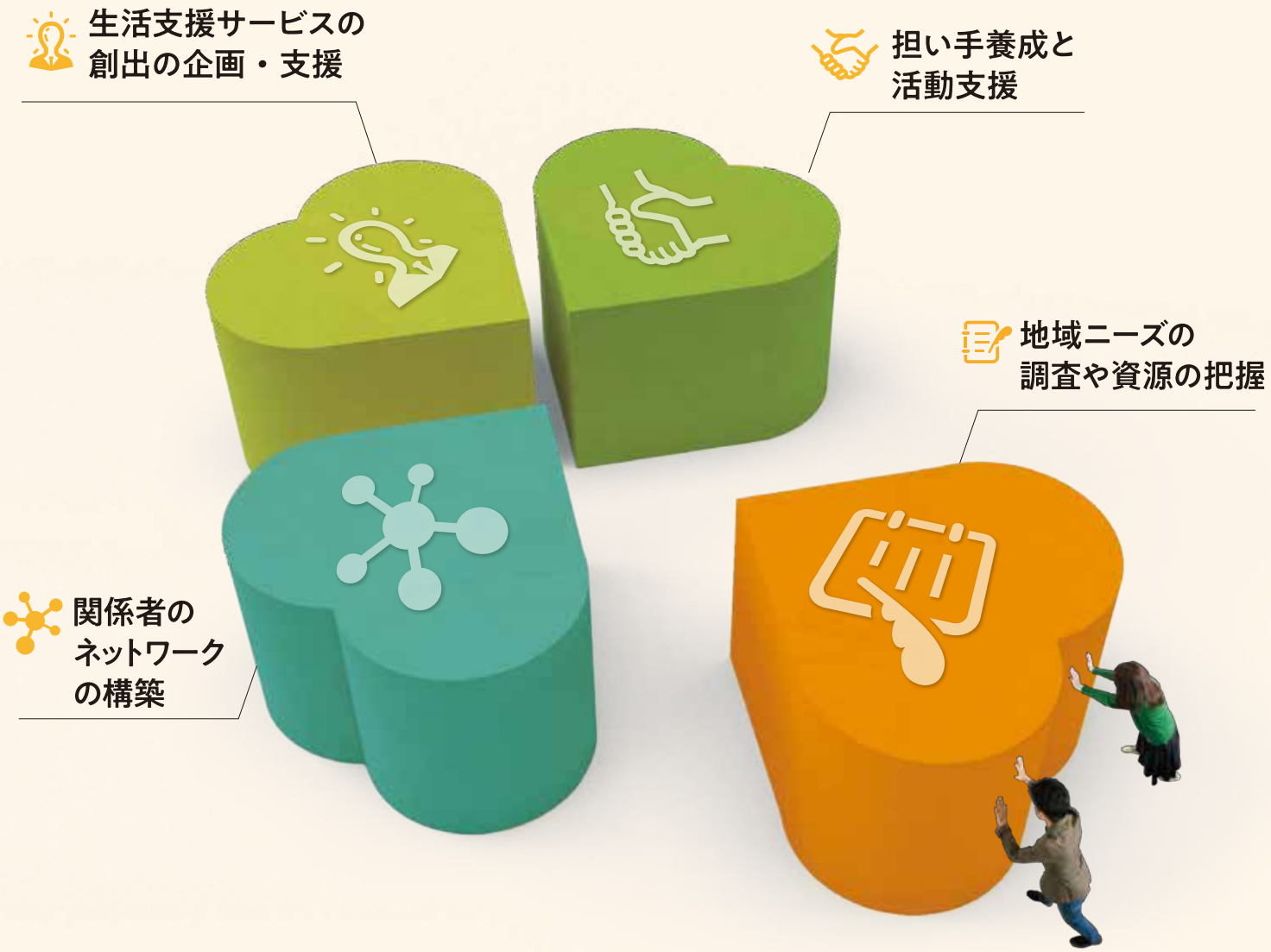
京都市地域支え合い活動創出事業

地域支え合い活動創出コーディネーター 支援事例集



地域における支え合いの仕組みの構築に向けて

京都市保健福祉局　健康長寿のまち・京都推進室　健康長寿企画課
社会福祉法人 京都市社会福祉協議会

平成31年３月作成

contents

1　はじめに　3

2　地域支え合い活動創出事業の概要について　4

（1）事業目的　4
（2）地域支え合い活動創出コーディネーターの配置　5
（3）地域支え合い活動創出コーディネーターの取組　5

3　支援事例一覧　7

■ 生活支援サービスの創出の企画・支援　8
（1）地域支え合い活動調整会議（連絡会議と実務者会議）の開催　8
（2）マンション等で暮らす単身高齢者への生活支援活動の提案と支援　10
（3）生活支援グループの立ち上げ支援　12
（4）いくつになっても友達ができる居場所づくりの実践　14
（5）福祉施設と地域団体の連携による居場所づくり　16
（6）地域課題に合わせた居場所づくり　18
（7）生活課題の解決に向けたイベントの試行実施　20

■ 担い手の養成と活動支援　22
（8）「見守り対象」から「地域の担い手」へ　22
（9）多様な主体と連携して、支え合いの担い手を養成　24
（10）男性の生きがいづくり・仲間づくりの支援　26

■ 関係者のネットワークの構築　28
（11）地域活動に取り組む運営者のネットワークづくり　28

■ 地域ニーズの調査や資源の把握　30
（12）高齢者の生活支援ニーズに関するアンケート調査　30

1

はじめに
―事例集作成にあたって―

平成27年の介護保険法改正により、多様な生活支援・介護予防サービスが利用できる地域づくりを市町村が支援する「生活支援体制整備事業」が創設されました。これは、一人暮らしの高齢者や支援を必要とされる高齢者が増加する中、高齢者が住み慣れた地域での暮らしを継続できるよう、生活支援の充実及び高齢者の社会参加の推進を一体的に目指すものであり、京都市では平成28年５月から「地域支え合い活動創出事業」として実施しています。

本事業においては、京都市から京都市社会福祉協議会（以下、「市社協」という。）への委託により、各区社会福祉協議会に地域支え合い活動創出コーディネーター（以下、「コーディネーター」という。）を配置しています。

市社協では、これまでから区・学区社会福祉協議会とともに、高齢者をはじめ障害者、児童が生き生きと安心して暮らせる「住民主体の地域福祉活動」を展開してきました。本事業では、このような市社協の活動実績とノウハウを最大限活用しながら、積極的に取り組んでいるところです。

事業開始から約３年が経過し、地域で高齢者を支えていくために必要な生活支援サービスの創出や担い手の養成、関係者のネットワークの構築等の取組が進んでいます。

本事例集は、地域での困りごとの解決等に向けて、コーディネーターが果たす機能やプロセスをより具体的にイメージできるよう、12の事例を取り上げて「見える化」を図りました。

どの事例にも共通して言えることは、「協働」の取組であり、コーディネーターは総合的に「つなぐ」機能を発揮するよう心がけています。例えば、コーディネーターは関係者同士をつないだり、必要な情報をつないだりする潤滑油の役割や、多様な主体に対して活動への協力を依頼する役割を担い、「協働」の促進につながるよう活動しています。引き続き、コーディネーターは、その機能を発揮して、住民主体の地域福祉活動が地域の暮らしの場で充実されるよう取り組む必要があります。

この事例集がきっかけとなって、更に多くの方々の「協働」につながり、その結果、地域における生活支援の充実や生きがいづくりにつながれば幸いです。

2

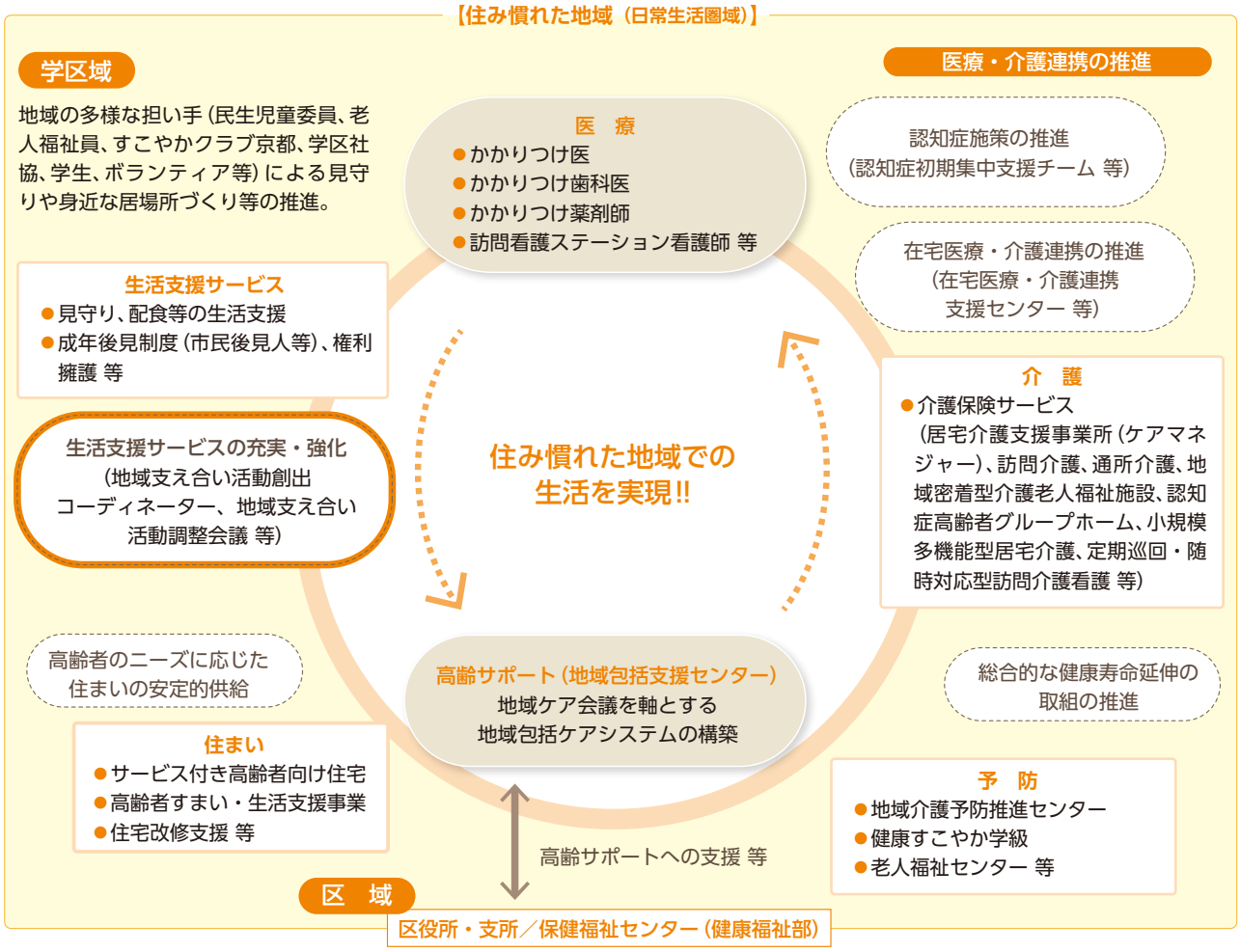
地域支え合い活動創出事業の概要について

1 事業目的

京都市では、高齢者一人ひとりができる限り住み慣れた地域で生活ができるよう、医療、介護をはじめとする様々な関係機関との連携を進めることで、地域ぐるみで高齢者の暮らしを支援する「京都市版地域包括ケアシステム」の構築に取り組んでいます。

その中で、介護保険や医療保険といった制度では対応できない、日常生活に必要な生活支援に対して、「地域支え合い活動創出コーディネーター」の配置や「地域支え合い活動調整会議」の開催を通じ、地域の住民団体、ボランティア団体や民間企業等の多様な主体が生活支援サービスを提供することで、多様な生活支援ニーズに応える体制づくりを進めています。

京都市版地域包括ケアシステムのイメージ



2 地域支え合い活動創出コーディネーターの配置

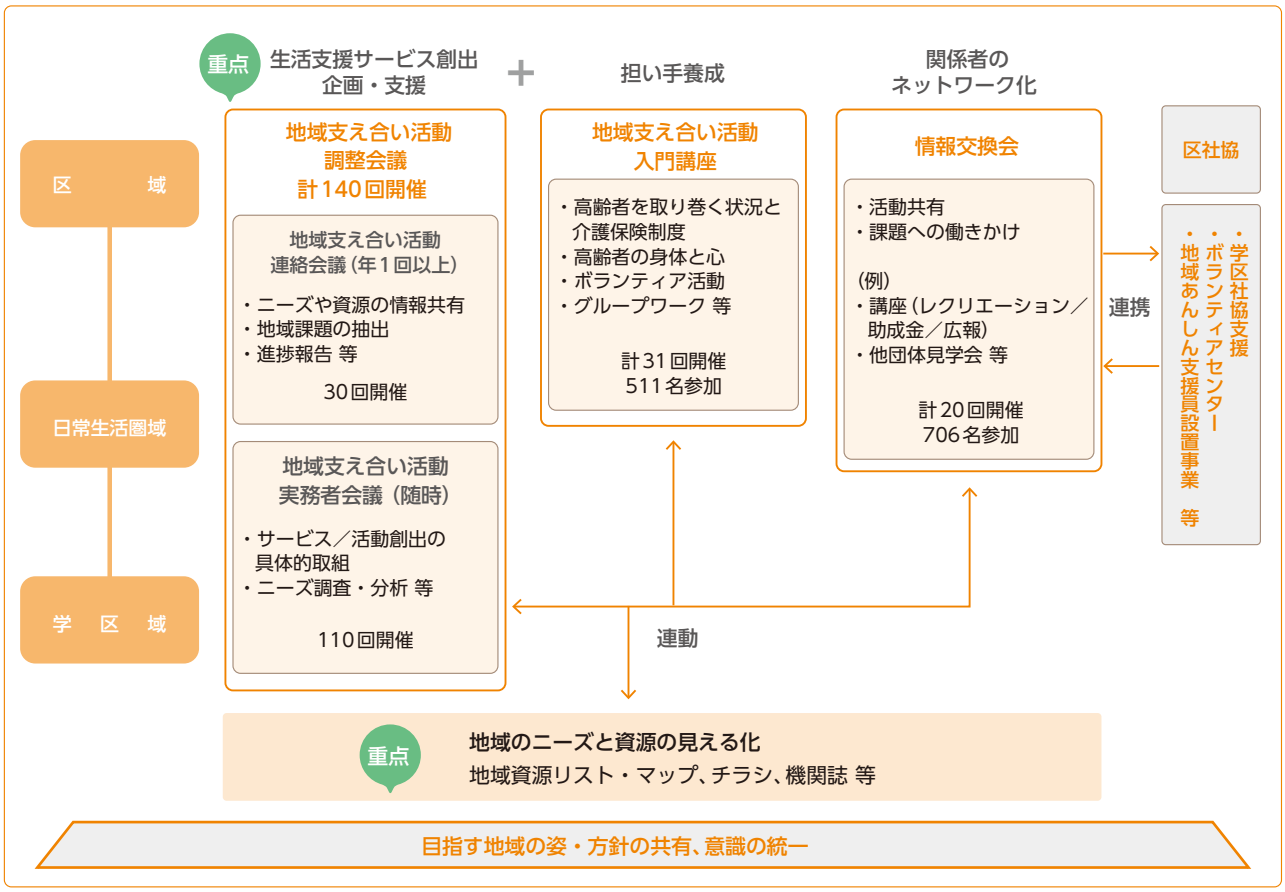
地域で高齢者を支えていくために必要な生活支援サービス等の提供体制の創出に効果的に取り組んでいけるよう、京都市では平成28年５月から「地域支え合い活動創出コーディネーター」を全区に配置しています。（配置場所は各区社会福祉協議会）

〈地域支え合い活動創出コーディネーターの主な役割〉
① 地域のニーズと資源の把握
② 多様な主体への協力依頼等の働きかけ
③ 関係者のネットワーク化
④ 生活支援の担い手の養成やサービスの開発 等

3 地域支え合い活動創出コーディネーターの取組

目指す地域の姿・方針の共有、意識の統一を土台に、生活支援サービス創出の企画・支援を行う地域支え合い活動調整会議、支え合い活動の担い手を養成する地域支え合い活動入門講座、関係者のネットワーク化を通じて居場所の運営課題の解決を目指す情報交換会、地域のニーズと資源の見える化等、高齢サポート（地域包括支援センター）や区社会福祉協議会等と連携して進めています。

【事業の全体概要図（数字は平成29年度実績）】



【参考１】地域ケア会議と調整会議との関係イメージ図

●地域ケア会議

開催者	会議名
区役所・支所	区役所・支所の地域ケア会議 （地域包括支援センター運営協議会）
高齢サポート （地域包括支援センター）	日常生活圏域の地域ケア会議
	学区の地域ケア会議
	個々の高齢者の地域ケア会議

→ 地域包括支援ネットワークの構築

↓ 生活支援サービスに関する地域課題について、調整会議で具体的に検討する必要があるものは、調整会議に引き継ぎます。

●地域支え合い活動調整会議

開催者	会議名
区役所・支所 （事務局：各区コーディネーター）	・地域支え合い活動連絡会議 ・地域支え合い活動実務者会議

→ 生活支援サービスの創出

自分たちはどんな地域にしたいのか、そのためには地域でどんな取組ができるか検討し、新たに担い手となりうる地域住民等とともにできることから取り組みます。
取組にあたっては、幅広い主体が協働で取り組めるよう各区コーディネーターが支援します。

【参考２】地域支え合い活動調整会議は「連絡会議」と「実務者会議」で構成

調整会議は２つの会議で構成されています。連絡会議は生活支援ニーズや資源などの情報共有を目的とした会議であり、実務者会議は生活支援サービスの創出に向けて、具体的に取組を進める協議や協力依頼の会議です。

〈地域支え合い活動連絡会議〉（年１回以上開催）　※地域ケア会議との連続開催も想定される

地域の生活支援ニーズや資源などの情報共有

〈地域支え合い活動連絡会議の構成員〉

主催者
・区役所・支所（開催主体）　・各区コーディネーター（事務局）

＋

必須構成員
・高齢サポート（地域包括支援センター）

＋

任意構成員
（例）・介護支援専門員会　・各区老人クラブ連合会　・各区民生児童委員会
・各区社会福祉協議会　・ほか、任意で出席を依頼する団体

〈地域支え合い活動実務者会議〉（随時開催）

生活支援サービス創出に向けた協議、協力依頼

〈地域支え合い活動連絡会議の構成員〉

主催者
・区役所・支所（開催団体）　・各区コーディネーター（事務局）

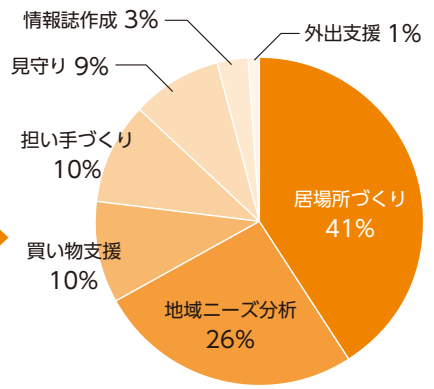
＋

テーマ（課題）に応じて出席
・住民（利用者又は担い手）の立場にある関係団体
・地域ニーズや地域資源を把握している関係団体
・生活支援等サービスを担う事業主体、団体
・地域福祉活動等を担う関係団体
・高齢者の生活支援や地域づくりに関係する行政機関　等

※区役所・支所及び地域包括支援センターは必要に応じて出席

→

実務者会議の開催テーマ



3

支援事例一覧

地域支え合い活動創出コーディネーターが総合的なつなぎの機能を発揮して、「協働」の輪を広げていった12事例を取り上げています。

■ 各事例に共通するコーディネーターの活動（コミュニティワーク）

①気付きをうながす → ②みんなをつなぐ → ③みんなで取り組む

		事例テーマ	主な関係機関・団体 ※区社協及び区役所・支所は全事例に該当
生活支援サービス創出の企画・支援	①	地域支え合い活動調整会議 〈連絡会議と実務者会議〉の開催	地域団体、ＮＰＯ、民間企業、地域包括
	②	マンション等で暮らす単身高齢者への 生活支援活動の提案と支援	居場所運営団体、地域包括、推進センター
	③	生活支援グループの立ち上げ支援	居場所運営者
	④	いくつになっても友達ができる 居場所づくりの実践	民間企業、地域包括、推進センター
	⑤	福祉施設と地域団体の連携による居場所づくり	地域団体、福祉施設
	⑥	地域課題に合わせた居場所づくり	地域団体、福祉施設、地域包括
	⑦	生活課題の解決に向けたイベントの試行実施	地域団体、福祉施設、事業者、民間企業、地域包括
担い手の養成と活動支援	⑧	「見守り対象」から「地域の担い手」へ	地域活動者、地域包括
	⑨	多様な主体と連携して、支え合いの担い手を養成	事業者、いきいき市民活動センター、地域包括、 推進センター
	⑩	男性の生きがいづくり・仲間づくりの支援	地域団体、地域包括、推進センター
関係者のネットワーク構築	⑪	地域活動に取り組む運営者のネットワークづくり	居場所等運営者
地域ニーズの調査や資源の把握	⑫	高齢者の生活支援ニーズに関するアンケート調査	老人福祉センター、地域包括、推進センター

〈名称・用語を一部略称しています〉
・コーディネーター：地域支え合い活動創出コーディネーター
・地域包括　：高齢サポート（地域包括支援センター）
・推進センター　：地域介護予防推進センター
・社協　：社会福祉協議会
・民協　：学区民生児童委員協議会
・区担当課　：区役所・支所健康長寿推進課
・調整会議　：地域支え合い活動調整会議
・連絡会議　：地域支え合い活動連絡会議
・実務者会議　：地域支え合い活動実務者会議
・入門講座　：地域支え合い活動入門講座

1

コーディネーターの
取組事例

地域支え合い活動調整会議〈連絡会議〉〈実務者会議〉の開催（準備と進め方）

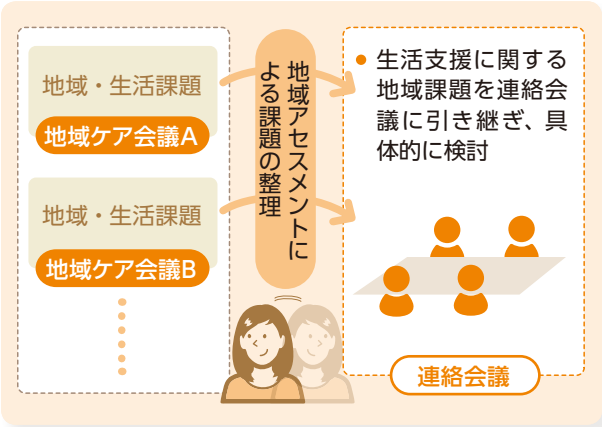
地域包括が開催する地域ケア会議で抽出された生活支援サービス・活動に関する地域課題を調整会議に引き継ぎ、具体的な検討と創出に向けた取組を進める。

きっかけ（課題になっていたこと等）

- 事業開始から地域ケア会議に参画して、積極的に地域課題の把握等に努めてきた。
- 地域ケア会議での検討を通じて生活支援に関する地域課題が浮かび上がり、その具体的な解決に向けて検討することになった。
- 地域ケア会議から調整会議に引き継いで、生活支援サービス創出の企画・支援を行った。

コーディネーターの動きと展開

- 区担当課とともに、地域ケア会議で把握した地域課題と地域アセスメントを照合させながらエリア毎に共通する課題の設定を行った。
- 共通する課題のうち、生活支援に関する地域課題の解決に向けては、区包括運営協議会の構成員の他に生活支援やまちづくりを行う機関や団体にも、調整会議に参画してもらうことで具体的な検討が可能と考えた。



取組のポイント

その1　地域ケア会議に参画し、地域課題を把握。

その2　地域アセスメントを行い、調整会議に引き継ぐ生活支援に関する地域課題を設定。

その3　課題解決に向けた取組に生活支援等を行う多様な団体が参加。

年・月	出来事
平成29年5月	区担当課と調整会議のすすめ方について意見交換。
6月上旬	区担当課やコーディネーターから任意構成員に連絡会議への打診・参加依頼。
6月中旬	区包括連絡会にてコーディネーターが引き継ぐ生活支援に関する地域課題を確認。
7月	調整会議〈連絡会議〉の開催。
7月～	具体的な検討と創出に向けた取組（必要に応じて実務者会議の開催）。

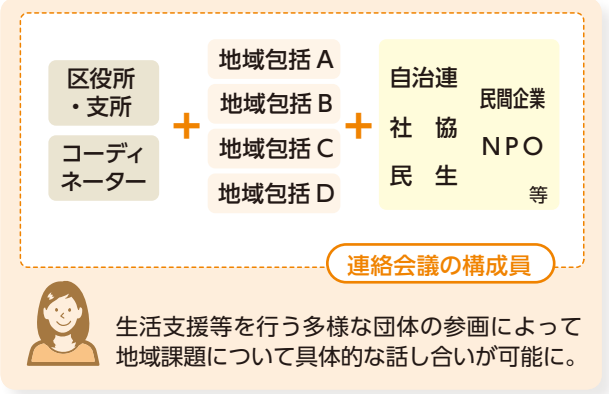
取組の展開

●区担当課とコーディネーターが分析した地域・生活課題を共有し、任意構成員に連絡会議への参加を打診・依頼した。

●生活支援に関する地域課題とサービス創出に向けた取組のイメージを４点立案して、まずは地域包括や生活支援等を行う多様な団体との確認・共有を行った。

●連絡会議で生活支援に関する地域課題と創出に向けた取組のイメージを確認・共有した。

●確認・共有された生活支援に関する地域課題の取組については、必要に応じて実務者会議を開催し、具体的な検討と創出に向けた取組を進めることにした。



参考資料

■ 地域ケア会議から出された生活支援に関する地域課題の設定について

地域課題	課題1	課題2	課題3	課題4
テーマ	マンションで暮らす高齢者の生活支援	担い手養成と町内単位での生活支援	山間地域における高齢者の買い物・外出支援	山間地域における高齢者の居場所づくり
取組の範囲・規模	マンション	町・組	学区	学区
取組のイメージ	高齢化が進むマンションを中心に、居場所づくりを行う当事者団体への支援と生活支援活動を一緒に創り出す	初年度は講座や研修会の開催を通じて担い手の養成に力を入れる。2年目以降に町内単位での生活支援を考えていく	地元高齢者の困りごと（買い物）に地域と施設の協働によって実現可能な生活支援活動を考えていく	地元高齢者の困りごと（冬季に居場所がないこと）に地域と施設の協働により居場所の開設を目指す

⇒上記、課題1の取組については取組事例②で紹介

担当コーディネーターのコメントと今後の展開

学区や日常生活圏域の地域ケア会議での地域課題の把握だけではなく、コーディネーターが地域福祉活動の実態や地域ケア会議で出された意見などから見出した地域課題を「見える化」することも大事です。

今後は地域ケア会議に参加していない層（ボランティアや住民）からの声も拾い上げていきたいと思います。

2

コーディネーターの
取組事例

マンション等で暮らす単身高齢者への生活支援活動の提案と支援

高齢化が進むマンションを中心に居場所運営団体への支援を通じて、新たな生活支援活動の創出につなげる。

きっかけ（課題になっていたこと等）

●居場所運営団体からコーディネーターに対して「居場所の開催の場には出てこられないが、気になる高齢者はいる。居場所とは異なる生活支援サポートがあれば安心して暮らすことができる」と今後の活動展開と「地域支え合いボランティア活動助成事業」の申請について、相談があった。

●マンションだけでなく近隣地域においても気になる高齢者は増加しており、居場所の参加者を介して「あそこのお婆さん、○○に困ってるみたい」と居場所運営団体に相談が入ってくるようになった。

コーディネーターの動きと展開

●コーディネーターは、居場所運営団体とともに、ニーズの把握と課題解決に向けた具体的な取組の検討を始めた。

●実務者会議を開催し、「困りごと相談会」と「窓拭きのお手伝い」の２つの活動をすることを決定した。

●「困りごと相談会」の実施にあたっては、関係者とのネットワークをつくり、地域包括は介護保険の説明や相談を担当し、推進センターは、栄養相談を実施した。

取組のポイント

その1　居場所運営から新たな生活支援の活動を提案。

その2　生活支援活動の実現に向けて実務者会議を開催し、協働による解決を目指す。

年・月	出来事
平成29年8月	「地域支え合いボランティア活動助成事業」（京都市）の申請相談。
9月～10月	ニーズの把握と問題の解決の具体化に向けた話し合い。生活支援活動の企画立案と関係機関への協力依頼。
11月	生活支援活動①（相談会）の試行。
平成30年1月	生活支援活動②（窓拭き）の試行。

取組の展開

- 居場所運営団体が新たに行う生活支援活動（「困りごと相談会」や「窓拭きのお手伝い」）の企画提案、チラシ作成、助成事業申請などのサポートをした。
- 気になる高齢者への声かけやチラシの掲示・配布などは居場所運営団体が担当した。
- 窓拭きのお手伝いの担い手には、入門講座受講者や地域あんしん支援員の支援対象者にもお願いし、活動支援をしてもらった。
  その結果、居場所運営団体以外の方にも活動を広げるきっかけとなった。

生活支援活動（試行）

利用者	活動後の感想	居場所運営団体
● 介護保険についてわかりやすく教えていただいた。 ● 今までは何ともなくても高齢になってできないことが増えてきた。		● 気になる人には積極的に声をかけた。 ● 関係者と助け合える活動をスタートできたことはうれしい。

生活支援活動①（相談会）

生活支援活動②（窓拭き）

担当コーディネーターのコメントと今後の展開

居場所の運営を支援する中で、居場所運営団体との関係性ができ、「本当に出てきてほしいと思う人が来られない。その人を支える手立てがないか」と相談を受けたことから、窓拭きのお手伝いという一つの生活支援活動を創り出すことができました。今後は、本事例を参考に居場所の運営を通じた課題の抽出や、新たな生活支援活動の創出に関する支援を推進していきたいと思います。

3

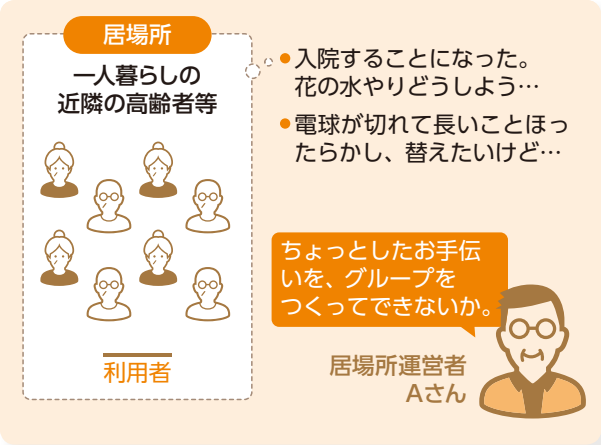
コーディネーターの
取組事例

生活支援グループの立ち上げ支援

立ち上げに向けたグループづくりと活動の仕組みづくりをサポート。

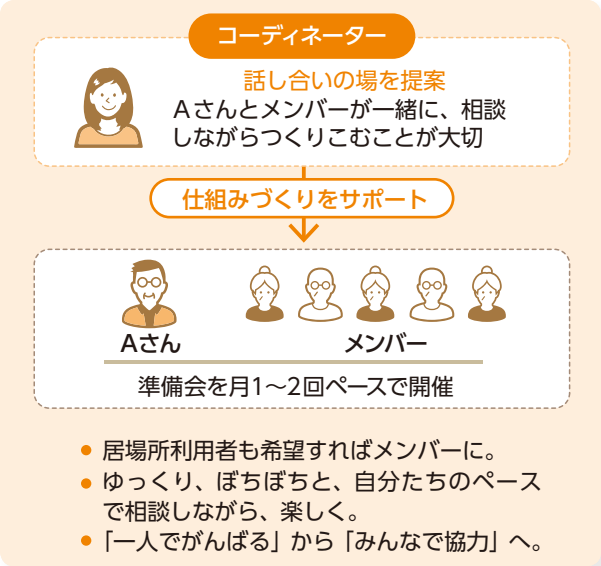
きっかけ（課題になっていたこと等）

- Aさん（70歳）は20年以上、親の介護をしてきた。今は一人暮らしとなり、人のため、自分のために３年前に自宅を改装して「居場所」を開設した。
- 近隣の高齢者らが集う「居場所」で、利用者から生活上のちょっとした困りごとの相談を受けることが増えてきたため、生活支援グループを立ち上げて活動したいと思うようになった。
- Aさんは友人と一緒に受講した入門講座をきっかけに、コーディネーターと出会った。



コーディネーターの動きと展開

- 入門講座後のフォローアップとして、Aさんに声かけした時に、「生活支援グループをつくりたい」というAさんの思いを知った。
- 居場所を訪問し、Aさんと面談した。面談時、一人で生活支援活動を開始しようとしていたAさんに「一緒に活動したい人はいませんか？」と問いかけると、すぐに思いあたる人が浮かび上がった。
- 生活支援グループを立ち上げるために、Aさんに一緒に活動したい人とグループをつくって準備会を開催することを提案し、月に１回程度のペースで開催することになった。



支援のポイント

その1　入門講座をきっかけにした支援。
その2　定期的にみんなで話し合う場を持つよう提案。
その3　事前にルールづくりをして、グループ運営への不安を解消。

年・月	出来事
平成29年３月	入門講座の実施。
４月	Ａさんの居場所を訪問。準備会開催の提案。
５月～	準備会に参加。（月１回程度のペース）
９月～	生活支援グループの活動開始。

取組の展開

●準備会のメンバー全員で、生活支援グループの活動についてイメージを共有できるよう、先行して取り組んでいるグループの運営方法を紹介した。
●メンバー全員で話し合い、活動のルールづくりや、事故やトラブルへの対処等も含んだマニュアルづくりができるようサポートすることで、生活支援グループを立ち上げ運営していくことへの不安を解消していった。
●丁寧に話し合い、準備会の立ち上げから５ヵ月で、居場所で相談のあった困りごとを解決するための生活支援グループの活動を開始することになった。
●活動開始後も全員で話し合うことが継続できるよう、定例の懇談会開催を提案し、活動で感じたことなどを自由に話し合う懇談会を月に１回開催することになった。
●活動開始から５ヵ月後、地域での生活支援グループ同士の情報交換会に参加した。そこで各グループが自らの活動を報告し合った。
●居場所で困りごとをキャッチして活動を行うＡさんたちの報告は、他グループから「たくさんの依頼があってすごい!」という声をいただき、活動を継続する自信となった。

生活支援グループ設立！

●ルールをつくってグループで活動できるのは大きい。

設立後の感想

●コーディネーターに何でも相談した。後押ししてくれなかったら、ここまでできなかった。

準備会の様子

担当コーディネーターのコメントと今後の展開

生活支援の活動者は、対象者の生活の深いところまで知ることになるため、利用者の課題を抱え込んでしまうことがあります。グループの支援をしていて、活動者同士が日頃の生活で感じる悩み等を相談できる場所をつくることが大切だと感じています。

本事例では、「居場所」を拠点に生活支援グループの活動をしているため、活動者全体の顔の見える関係性がはじめからあり、活動開始前からみんなで話し合ってルールをつくることができました。また、活動開始後の情報共有も日常的にできています。しかしながら、「居場所」のオープンな空間では話しにくい事柄もあるため、自由に話し合うことができる定例の懇談会開催を提案しました。

Ａさんたちのグループでは、月に１回懇談会を開催し、活動者同士が互いに相談し合いながら、活動を継続できています。今後も、必要に応じて情報提供等の支援をしていきたいです。

4

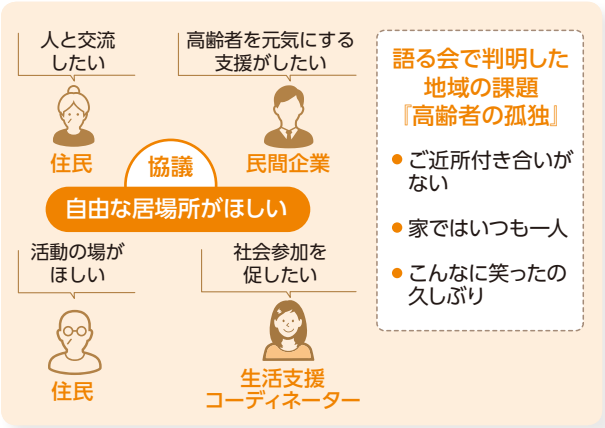
コーディネーターの
取組事例

いくつになっても友達ができる居場所づくりの実践

住民の主体的な取組を広めるため、みんなが「無理をしない」居場所づくりを広めていく。

きっかけ（課題になっていたこと等）

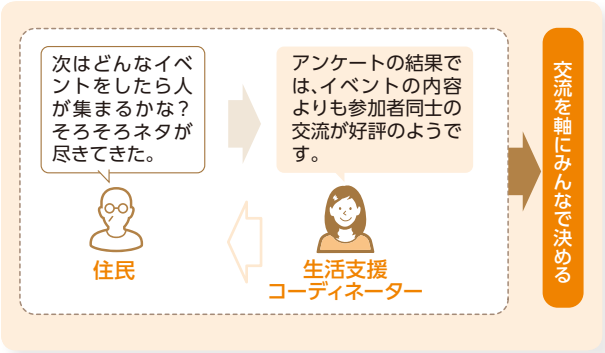
●地域包括や推進センターの専門職は、「地域のつながりが弱くなった」と感じていた。
●地域住民の日常生活に対する思いを知るために、「健康と地域について語る会」を開催した。
●語る会で、地域の高齢者の孤独が浮き彫りになり、参加者から気軽に参加できる自由な居場所がほしいという声が多くあがった。
●そこで、語る会のアンケート結果を踏まえて、地域住民と活動を支援する民間企業とでつくった委員会で、関心が高いテーマのイベントを月に１回のペースで開催することにした。



コーディネーターの動きと展開

●参加者が主体的に居場所の運営に関わることができるよう、毎回参加者全員で次回何をするのかを検討する時間を持つよう促した。
●最初は、「片付け」や「健康」等の興味をひくテーマのイベントを実施することで、大勢の人を居場所に集めることに徹した。
●回数を重ねるにつれて、イベントの内容を目的に参加するのではなく、イベントで出会った人に会いに来る場所に変化してきた。アンケート結果も、参加者同士の交流に喜びを感じているという声が増えてきたため、今後目指す居場所のスタイルを検討してみてはどうかと提案した。

●参加者全員で話し合った結果、特別なイベントを繰り返すのではなく、参加者同士が友達になることを軸として、参加者が積極的に居場所運営に関わっていくスタイルに変えた。



取組のポイント

その1　段階的に居場所のスタイルを変える。
その2　参加者同士の交流を大切に、友達ができる居場所にする。
その3　支援者も一緒に居場所を楽しむ。

年・月	出来事
平成28年11月	「健康と地域について語る会」を開催。
平成29年1～3月	「自由な居場所づくり」の企画検討。
4～6月	「片付け」をテーマとしたイベントを開催。（居場所①）
7～8月	「健康」をテーマとしたイベントを開催。（居場所①）
9月～	参加者が楽しみながら運営を手伝う居場所づくりに転換。（居場所①）
11～12月	他地域での「自由な居場所」開設を検討。（居場所②）
12月	2つ目の居場所のスタートイベントを開催。（居場所②）

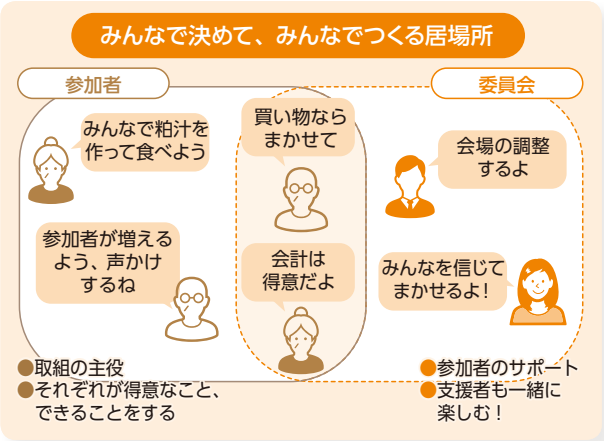
取組の展開

●居場所のスタイルを変更することで、「寒くなってきたからみんなで粕汁を作ろう」と決まったら、それぞれが「粕汁のレシピを準備するよ」「お買い物してきますよ」「会計なら任せて」等と自分が得意なこと、できることを提案して主体的に居場所に参加するようになった。

●運営費をどこから捻出するかも参加者全員で検討し、「自分達がやりたいことをするためのお金は自分達で出そう」と決め、参加費を集めて、お食事会、クリスマス、節分や七夕といった季節の行事を実施することにした。

●次第に、参加者だけでなく委員会の活動を支援する民間企業も一緒に楽しむようになり、それぞれが得意なことを持ち寄って集まるみんなが「無理をしない」居場所づくりができたと感じている。

●このみんなが「無理をしない」居場所を広めるために、他の地域で同じ方法で居場所をつくることに挑戦したところ、こちらも「いくつになっても友達ができる」居場所として、地域に定着してきた。



粕汁会

担当コーディネーターのコメントと今後の展開

「楽しい」ということは、「主体的に活動」できていることだと思います。主体的に活動するためには、目的が必要です。事例では、イベント目当てに参加した人も、次第に居場所のお友達に会うことを楽しみに集まるよう変わりました。そこで、参加者全員でやりたいことを決める居場所に切り替えると、自然と役割分担が生まれて、開催準備の負担が一人に集中することのない、『無理をしない』居場所の「開催」につながりました。

また、この『無理をしない』には、もう一つ意味があります。それは、無理をして「参加」しなくても良いということです。「来月こなかったら、再来月もこれないというのはやめようね」と声をかけ合い、参加できない日があっても、またいつでも来られる自由な居場所を目指しています。そのためには、参加者同士がお友達になることが重要です。参加者間の交流を大切に、いくつになっても笑い合える無理をしない居場所を広めていきたいと考えています。

5

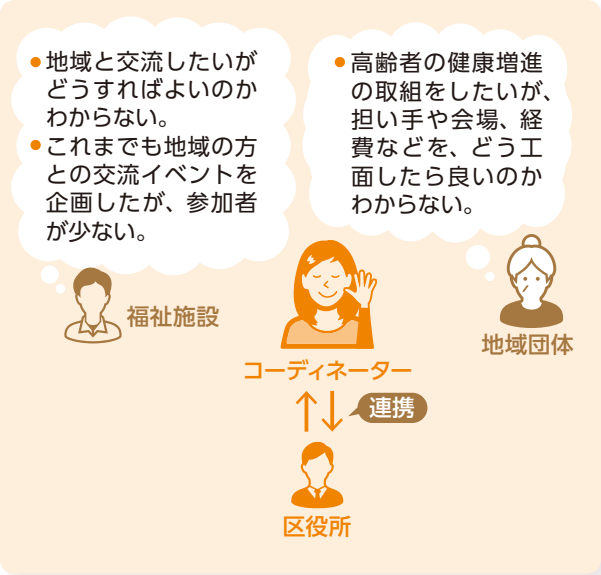
コーディネーターの
取組事例

福祉施設と地域団体の連携による居場所づくり

連絡会議で高齢者の居場所の増設を地域ニーズと設定して、関係機関や地域団体と連携して開催。

きっかけ（課題になっていたこと等）

- コーディネーターが福祉施設職員から生活支援サービス等に関する情報を収集する中で、地域と良好な関係を構築したいが手法がわからないという福祉施設の課題を把握することができた。
- 地域では、健康寿命の延伸が課題になっており、地域団体、関係機関、行政が一体となり、学区ごとの健康増進の取組を推進することが求められていた。
- 連絡会議において、介護予防、健康寿命の延伸に資する通いの場の支援を強化することが決まった。



コーディネーターの動きと展開

- 区内にある福祉施設が地域団体と協働して行っているラジオ体操の取組について、相談を受けた福祉施設に紹介し、実務者会議で実施に向けて詳細を検討することになった。
- ラジオ体操の見学等を通じて、運営方法を学ぶ機会をつくり、福祉施設に居場所のイメージを持ってもらった。
- 福祉施設におけるラジオ体操の開催に向けて、学区保健協議会連合会や学区自治連合会等の地域団体との調整を行った。

取組のポイント

その1 福祉施設のニーズと地域のニーズとの丁寧なつなぎ役を務め、お互いの関係性の促進を支援。

その2 ラジオ体操等の先行事例を紹介することにより、イメージが持てるよう福祉施設に働きかけ。

その3 地域住民と施設の入所者の交流を促し、施設の地域貢献を支援。

年・月	出来事
平成29年3月	福祉施設の運営推進会議に参加。施設の悩みを把握。連絡会議において居場所・サロン・健康教室などの支援強化をすることが決定。
5月	実務者会議を開催し、居場所について福祉施設と、具体的な検討を開始。
9月	実務者会議に地域団体を加えて、開催内容の詳細を決定。
10月	居場所（ラジオ体操）の運営開始。

取組の展開

●地域団体（学区自治連合会、学区保健協議会連合会）の協力を得て、福祉施設が週１回のラジオ体操を開始した。ラジオ体操には、地域住民と施設の入所者が参加し、交流につながった。

ラジオ体操の様子

●福祉施設の職員に、高齢者の居場所運営者の情報交換会に参加してもらうなど、コーディネーターが継続開催のための側面的な支援を行った。

担当コーディネーターのコメントと今後の展開

ラジオ体操は、多くの人にとって親しみがあり、短時間で気軽に参加することができ、生活習慣に取り入れやすい取組です。健康増進の効果はもとより、参加者同士の交流が生まれ、施設が身近な相談窓口であることや施設の入所者も地域の一員であるということへの理解が得られるなど、地域とのつながりをつくるきっかけにもなります。

さらに、ラジオ体操は実施する内容が決まっており、短時間でできるため運営者にとっても負担が少なく、継続的に福祉施設が地域貢献を行うことができます。今では、地域団体が気になる方への声かけを行い、福祉施設が地域住民の居場所になっています。

お互いの顔が見える関係の構築から、気にかけ合う関係、困りごとを助け合う関係に発展することも期待できます。

今後は、継続開催を支援しつつ、この取組を新たな地域に広めていくために関係機関に働きかけていきたいと思います。

6

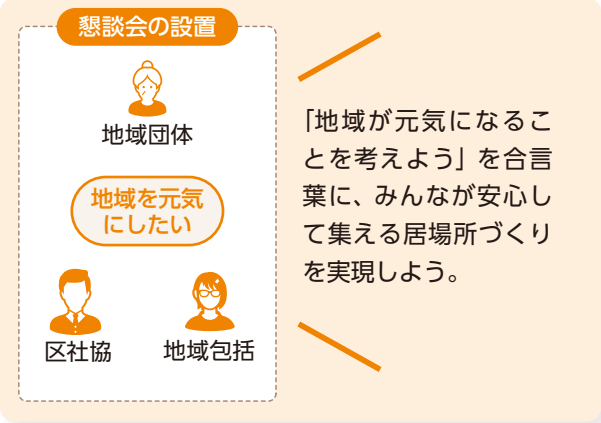
コーディネーターの
取組事例

地域課題に合わせた居場所づくり

中山間地域で暮らす住民の課題分析を行い、住民が地域の課題に自発的に参加できるよう、地域団体、地域包括、福祉施設の協働を促進して、居場所の立ち上げを支援。

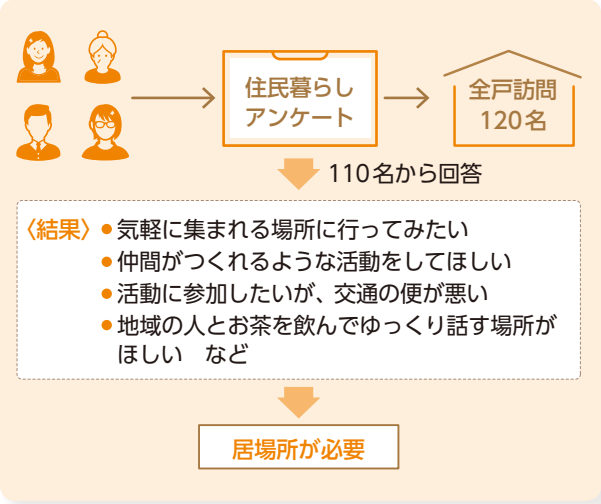
きっかけ（課題になっていたこと等）

- 少子高齢化と転出の増加により人口が減少し、地域住民による支え合いが一層求められていた。
- 集落が点在する地域で、みんなが集まって気軽に話ができる場所がなく、居場所づくりが課題になっていた。
- 高齢化する担い手問題により、運営方法にも工夫が求められていた。



コーディネーターの動きと展開

- 既設の地域の活性化を検討する懇談会にコーディネーターも参画することになった。
- 地域ニーズを把握するためのアンケート調査を提案した。
- 地域団体や、地域包括とともにアンケート調査を実施して、その結果から改めて居場所が必要であることを共通の認識とした。



取組のポイント

その1 ネットワークを構築して、構成メンバーが役割を分担し、高齢化する地域の担い手の負担軽減を目指す。

その2 アンケート結果を効果的に活用する。

年・月	出来事
平成27年9月	地域の活性化を検討する懇談会を設置。（構成員：学区社協、民協、自治連、老人福祉員、地域包括、福祉施設、区社協、単位老人クラブ）
平成28年7月	地域支え合い活動創出コーディネーターが懇談会に参画。
10~11月	地域住民のアンケートを実施。
12月	居場所づくりプロジェクトを発足。
平成29年4月	居場所の開設。

取組の展開

- 居場所の開設にあたって課題となった「場所」と「運営費」を解決するために、コーディネーターが学校の空き教室活用の提案・調整や助成金申請等の支援を行った。
- 構成メンバーの持つ技術や資源を把握し、それぞれが担う役割の調整を行った。
- アンケート調査結果に基づいて、懇談会から居場所づくりプロジェクトに移行した。
- 地域団体や、地域包括、福祉施設、区社協の協働を促進することで、居場所の開設における課題が解決し、お互いの信頼関係が深まった。特に、会場までの送迎は、福祉施設による地域貢献のひとつとして実施することになった。

この日はおにぎりを参加者全員でおいしくいただきました

プロジェクト会議では意見が飛び交っています

担当コーディネーターのコメントと今後の展開

少子高齢化だけでなく、人口減少も著しい地域で、高齢者が元気でいきいきと暮らし続けるために何が必要なのかを聴く機会として、住民全体に対してのアンケート調査を実施しました。その結果、人とつながる場所を求める声が多いと判明し、それを地域全体で共有したことで、地域住民が課題解決に前向きに取り組むきっかけになったように思います。

また、地域包括と密な連携をとることで、中山間地域の福祉施設が持つ社会資源を活用することができ、地域と福祉施設をつなぐきっかけにもなりました。

7

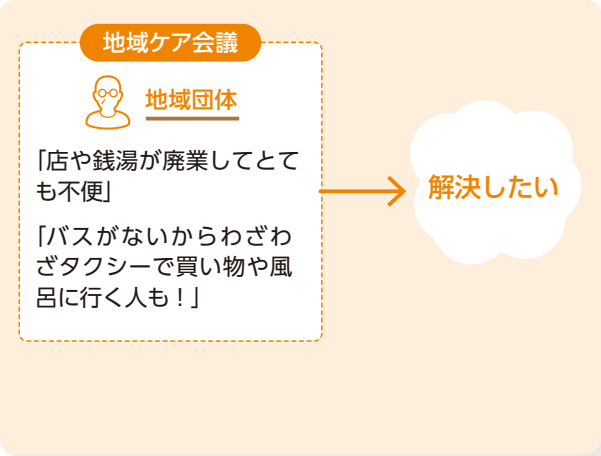
コーディネーターの
取組事例

生活課題の解決に向けたイベントの試行実施

「買い物をする場所がない」という地域の生活課題を解消するため、移動販売の実施に向けて、地域住民と民間企業等を「つなぐ」役割を担う。

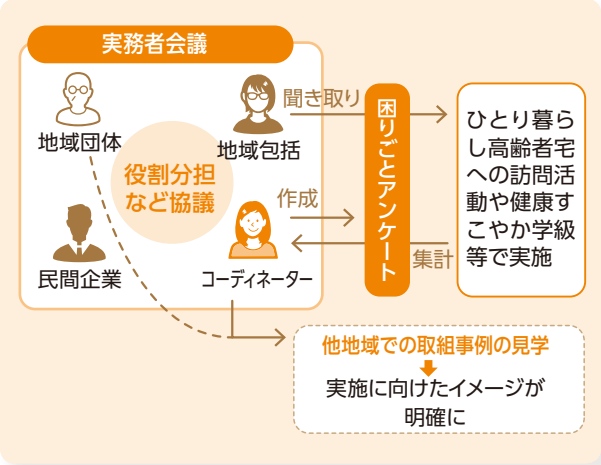
きっかけ（課題になっていたこと等）

- 地域の高齢化に伴って、個人商店の廃業が進んでいる上、坂が多くて交通網が十分に整備されていない状況で、生活用品の購入や飲食物の調達に困る高齢者が多くいた。
- 自宅に入浴設備が無い古い家屋やアパートが多いにもかかわらず、近隣の銭湯は廃業し始めており、遠方に足を運ばなければ入浴ができない高齢者がいた。
- 地域ケア会議で地域住民や民生委員から、課題を解決したいとの意見が出ていた。



コーディネーターの動きと展開

- 民間企業や福祉施設等、様々な関係者が地域ケア会議に参加できるよう調整した。
- 地域住民の課題意識を把握するためにアンケート調査を実施し、取組の方向性を検討する基礎資料を作成した。
- 具体的な解決策につなげるため、買物支援や入浴支援等のお試しイベントを実施することとし、実務者会議を開催して詳細を詰めていった。
- 実施に向けたイメージを明確にするため、他地域での取組事例の見学を調整した。



取組のポイント

その1 地域ケア会議や個別相談の積み重ねで明らかになった地域課題に取り組む。

その2 地域住民と様々な関係者が実務者会議で課題を共有する。

その3 近隣の福祉施設にも声をかけ、地域課題に対する理解と協力を得る。

年・月	出来事
平成27年度	地域ケア会議で社会資源について協議した際、地域団体から買い物弱者・入浴弱者に関する話題が挙がり、日常生活圏域の地域課題の優先事項に。地域ケア会議において地域と民間企業（移動販売）の意見交換を実施。
平成28年度	他区における成功事例等も踏まえ、買い物弱者の課題に対して民間企業（移動販売）が参画。
平成29年5月	地域住民を交えて、買い物弱者の課題について移動販売試行の協議を重ねる。
11月	試行イベントを開催して、事業効果を分析。
平成30年1月	定期実施に向けて協議。

取組の展開

- イベントを開催して「移動販売車による買い物支援」、「福祉施設の設備を活用した入浴支援」、「事業者の協力による配食弁当の試食会」の３つの取組を実施した。
- 特に好評だった移動販売については、継続して実務者会議を開催して定期実施に向けた検討を進めることにした。

参考資料（困りごとアンケート）

問４　問３で入浴に困っている方にお尋ねします。どのような支援があるとよいですか。（もっともあてはまるものを１つ）

- □ ご近所でのもらい湯
- □ 近くの福祉施設の浴場を使う
- □ 近くのホテルの浴場を使う
- □ 誰かに銭湯へ一緒についてきてもらう（送迎）
- □ 自宅の風呂に入れるようリハビリする
- □ その他（　　）

問５　問３で日常的な買い物に困っている方にお尋ねします。その理由を教えてください。（もっともあてはまるものを１つ）

- □ お店までが遠い
- □ 荷物が重くて運べない
- □ その他（　　）

問６　問３で日常的な買い物に困っている方にお尋ねします。どのような支援があるとよいですか。（もっともあてはまるものを１つ）

- □ 買い物に代わりに行ってもらう
- □ 買い物に一緒に行ってもらう
- □ 販売車が近くに来る
- □ お店までの送迎がある
- □ お店から商品を届けてもらう
- □ 生協などの注文票を代わりに書いてもらう
- □ その他（　　）

移動販売の試行実施

担当コーディネーターのコメントと今後の展開

地域団体からの切実な声とその声に何とか応えたいという地域包括等の思いから、みんなでイベントを企画しました。

地域団体や協力事業者が顔を合わせて、「こうしたい」「ここは対応できる」等の話し合いを重ねることで、互いの現状を伝え合い、着地点を見つけていくことができました。

イベント終了後は、実務者会議で移動販売の定期実施に向けて協議を続けました。定期実施を実現するにあたって、高齢者がより身近な場所で買い物ができるよう複数の拠点の確保や、買い物客を集め続けることが課題であると判明しました。その後、販売拠点として学校や福祉施設等の敷地を借りるお願いをしたり、地域団体とともに地域住民への移動販売の周知や買い物に来られた高齢者への支援体制を考えたりして、地域全体で移動販売の定期実施を実現しました。

8

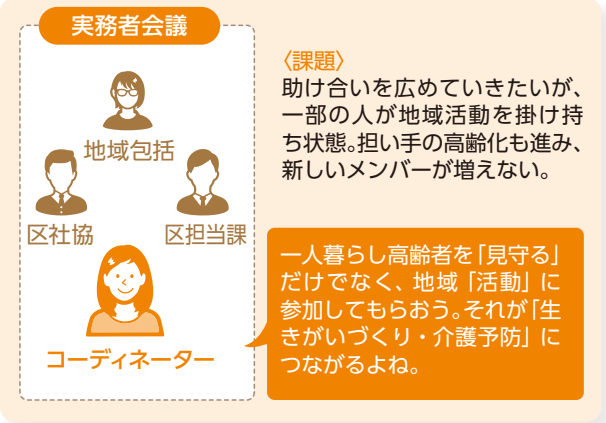
コーディネーターの
取組事例

「見守り対象」から「地域の担い手」へ

地域包括と協働して、一人暮らしの高齢者が“見守り対象”になるだけでなく“地域の担い手”として活躍できるよう、地域活動との出会いの場をつくる。

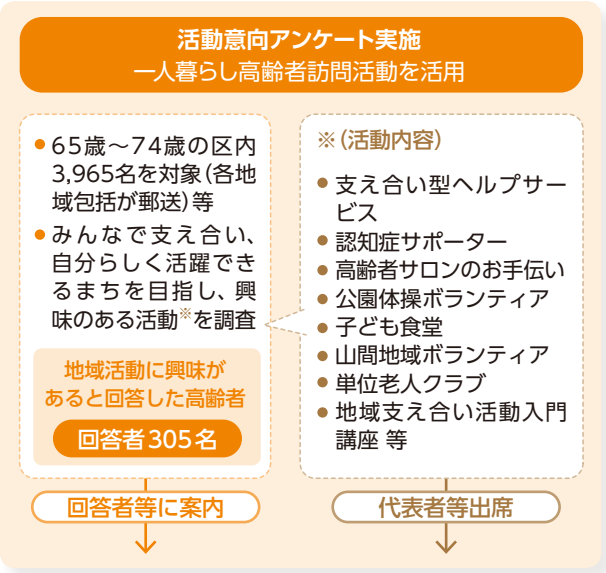
きっかけ（課題になっていたこと等）

- 地域の活動者から、地域活動の課題は「一部の人が地域活動を掛け持ちしている上、担い手の高齢化が進み、新しいメンバーが増えないことだ」との切実な声が挙がっていた。
- 実務者会議を開いて、生活支援の担い手の養成や活動支援のあり方を活発に議論した。
- 結果、各地域包括が行う一人暮らしの高齢者宅への訪問活動のお知らせにアンケートを同封して、地域活動への参加を呼びかけることにした。



コーディネーターの動きと展開

- 地域包括や区担当課と協働して、一人暮らし高齢者等3,965名を対象にアンケートを行った。
- アンケートで把握予定の地域活動に興味がある一人暮らし高齢者と地域活動との出会いの場をつくるため、タウンミーティングを開催することにした。
- アンケート結果から、地域活動に興味があると回答した305名に対して、タウンミーティングの開催を案内した。



次のページ

取組のポイント

その1　一人暮らしの高齢者が見守り対象になるだけでなく地域活動に参加してもらう。

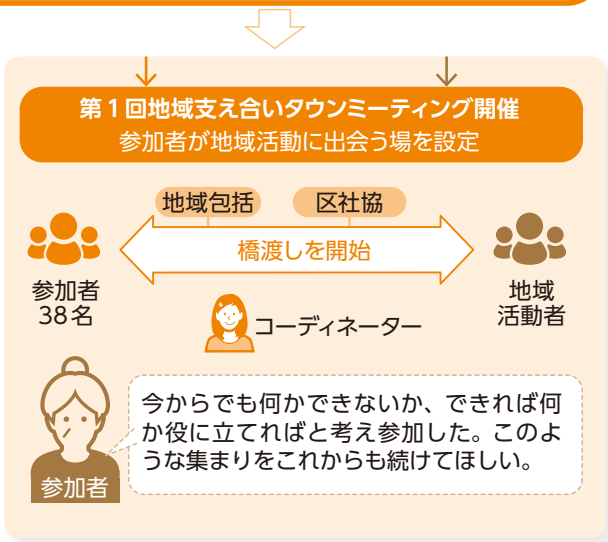
その2　地域活動に興味のある方を対象に、地域活動との出会いの場「タウンミーティング」を開催する。

年・月	出来事
平成29年6月	地域課題抽出。
7月	企画検討・調整。
9～10月	活動意向アンケート郵送。 集計分析／タウンミーティング準備。（5回）
11月	タウンミーティング開催。（38名参加）
12月～	参加者への活動支援。

取組の展開

●地域包括、区社協、区担当課、コーディネーターの協働によるタウンミーティングを開催した。各活動者からの活動発表と日常生活圏域ごとのグループワークを行った。「こんな地域にしたい」「こういうことはできる」等と話し合うことができた。

●タウンミーティング参加者にとって、イメージを膨らませるきっかけとなり、今後の活動への橋渡しやコーディネーターが開催する入門講座の受講へとつながった。



タウンミーティングの様子

グループワークの様子

担当コーディネーターのコメントと今後の展開

参加者は自分の住むまちの活動を知ることで、何かしたいという意欲喚起につながり、地域の活動者にとっては日頃の活動内容を発表することでモチベーション維持にもつながる取組となりました。

タウンミーティング実施後、より小さなエリアで、地域の活動に興味のある方と地域の活動が出会う場づくりが展開されています。

今後も、意欲を持った方が活動に踏み出せるような仕組みを考えていきたいと思います。

9

コーディネーターの
取組事例

多様な主体と連携して、支え合いの担い手を養成

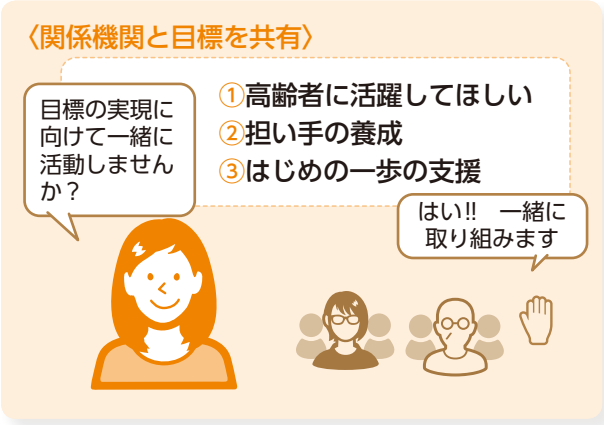
高齢者が支え合い活動開始の一歩を踏み出せるよう、入門講座やフォローアップ研修を関係機関と協働して開催。

きっかけ（課題になっていたこと等）

- 地域での活動に取り組むことを希望する高齢者は、生活状況や興味関心が様々であるため、多様なアプローチが必要だった。
- そのため、介護予防分野や市民活動分野、支え合い活動を積極的に進めている事業者団体等、多様な関係機関と協力して入門講座を開催することが必要だと考えた。
- また、入門講座の受講者が実際に活動を開始できるように地域の活動と結びつける仕組みづくりをする必要があった。

コーディネーターの動きと展開

- 入門講座の企画にあたって、講座の受講から支え合い活動の体験、体験から活動開始へと結びつく流れをつくることを大切にした。
- 新たな担い手養成のために、高齢者の活躍をテーマとして取り組んでいる地域包括や推進センター、いきいき市民活動センター等と、「活動のきっかけづくり」という目標を共有し、多くの受講者が実際に活動をスタートできるような入門講座を開催した。



取組のポイント

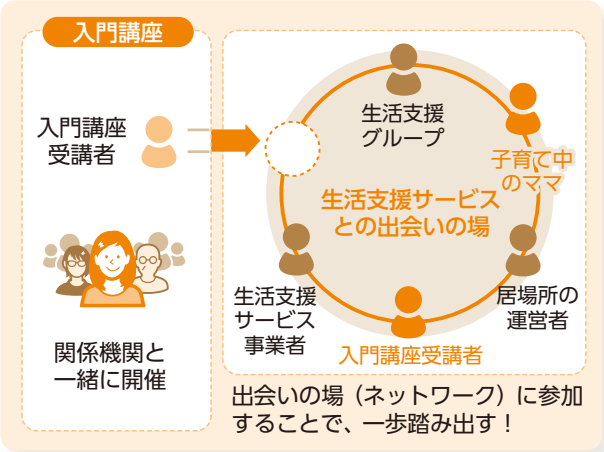
その1　支え合い活動に積極的な事業者・団体や関係機関と目標を共有する。

その2　入門講座受講者を支え合い活動に結びつける出会いの場（ネットワーク）をつくる。

年・月	出来事
平成29年7月	地域支え合い活動入門講座を開催。（～12月）
8月	推進センターとの連携による入門講座を開催。（2回目は12月）
9月	いきいき市民活動センターとの連携による入門講座を開催。（12月まで月1回）
12月	各講座受講者を対象に第1回フォローアップ研修を開催。

取組の展開

- 入門講座受講者に対するフォローアップ研修として、スーパーマーケットでの買い物支援体験や生活支援の実例紹介を行った。
- フォローアップ研修開催後も、生活支援サービス事業者・団体と入門講座受講者等が出会う場を継続開催することとした。
- 入門講座受講者に出会いの場（ネットワーク）への参加を促すことで、活動に向けて一歩踏み出す仕組みをつくった。



入門講座

生活支援の実例紹介

担当コーディネーターのコメントと今後の展開

思いを共有できる人、一緒に地域の支え合いの仕組みづくりをしてくれる人はいないかな、と日々考えながら地域の活動支援をしています。

これからの地域包括ケアシステムを支えるには、様々な人と連携し、協働していくことが求められていますが、協働するためにはお互いの力が発揮できる環境や仕組みづくりが必要です。

そして、どんなことができるかを地域のみんなで考えていきたいです。

10

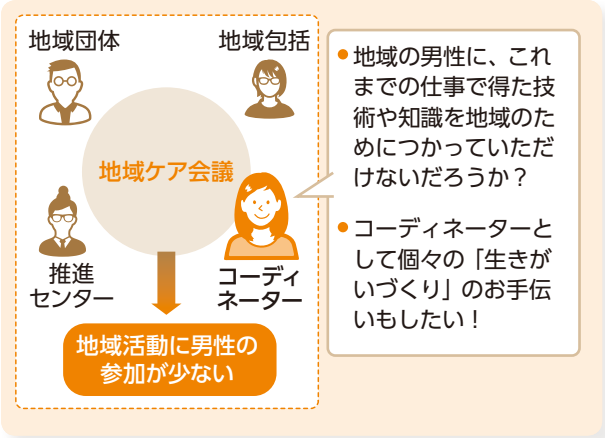
コーディネーターの
取組事例

男性の生きがいづくり・仲間づくりの支援

地域ニーズである「男性の地域活動への参加」と「地域の担い手づくり」を同時に実践。

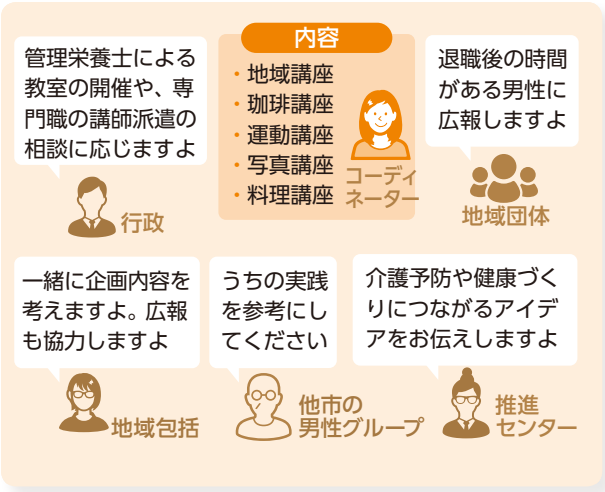
きっかけ（課題になっていたこと等）

- 地域ケア会議や調整会議で高齢者の生活支援ニーズと地域課題の把握を進める中、男性の地域活動への参加が少ないことが課題であるとわかった。
- 地域ニーズである「男性の地域活動への参加」に対応できる講座が開催できないか検討することにした。
- 入門講座ではカバーしきれなかった、担い手の「生きがいづくり」にもフォーカスできる内容を検討した。



コーディネーターの動きと展開

- 地域団体や関係機関（地域包括や推進センター）と地域課題を共有し、取組を検討した。
- 男性の「生きがいづくり」と「仲間づくり」をキーワードに講座の企画を始めた。講座終了後に、「仲間とともに地域活動を行うこと」を目指すこととした。
- 他市で活動する男性グループの視察や、地域資源を踏まえて関係機関とともに講座を企画した。



取組のポイント

その1 地域や関係機関と課題を共有し、取組を検討。

その2 男性の「生きがいづくり」と「仲間づくり」がキーワード。

その3 関係機関と協働して、キーワードに対応する講座を企画・開催。

年・月	出来事
平成28年～29年9月	地域ケア会議等で地域課題と高齢者の生活支援ニーズの把握をすすめ、「男性の地域活動への参加が少ないこと」を課題として認識。
平成29年10月～12月	男性の担い手講座の選考事例をリサーチ。関係機関・団体の協力を得て企画。
平成30年1月～3月	「男性の地域活動への参加」及び「地域の担い手づくり」を目的とした連続講座「男塾」を開催。

取組の展開

- 男性の仲間づくりを促進するため、単発の講座ではなく連続講座（名称「男塾」）として開催した。
- コーヒー講座等、男性の関心が高い内容を検討、実施した。
- 受講者に地域の居場所でコーヒーを提供するボランティアなど、講座で学んだ内容を即実践する機会を設け、活動がイメージできるようにした。

料理講座

講座参加者

コーヒー講座

担当コーディネーターのコメントと今後の展開

講座終了後、受講者は「仲間とともに地域のために活動しよう！」と、男性に限定した居場所づくりや地域イベントでのコーヒーボランティア等、主体的に活動を始めています。

これからも「地域のために何かやってみたい」「特技や経験を活かしたい！」と思っておられる方とつながり、地域の支え合いの輪を広げていく仲間を増やしていけたらと思っています。

11

コーディネーターの
取組事例

地域活動に取り組む運営者のネットワークづくり

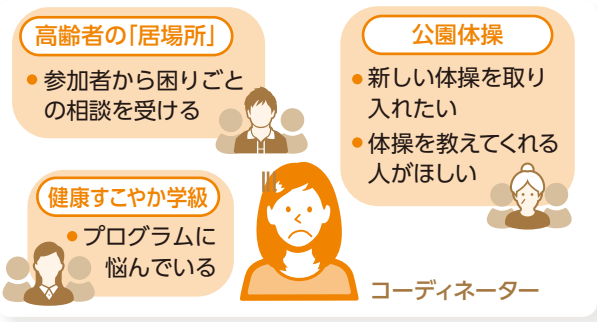
地域で多様な活動に取り組む運営者の課題を解決する力を引き出すため、互いに協力、支援し合う関係性をつくる。

きっかけ（課題になっていたこと等）

●地域福祉推進委員会では、地域と協働して「地域住民の孤立をなくす」ために居場所の取組を開始し、居場所の運営者を孤立させないよう、交流会を開催する等の支援を行っていた。

●一方、介護予防に取り組む公園体操や健康すこやか学級等については、それぞれ別の専門職が支援する等、事業開始以前は、他の活動の運営者と交流する機会や、地域の活動全体を把握する機会はなかった。

●事業開始をきっかけに、居場所や公園体操等のヒアリングを行ったところ、活動が違っても運営者の課題やニーズは、共通していることがわかった。



コーディネーターの動きと展開

●居場所や公園体操、健康すこやか学級等、活動の垣根を越えた運営者の情報交換会を開催することにした。

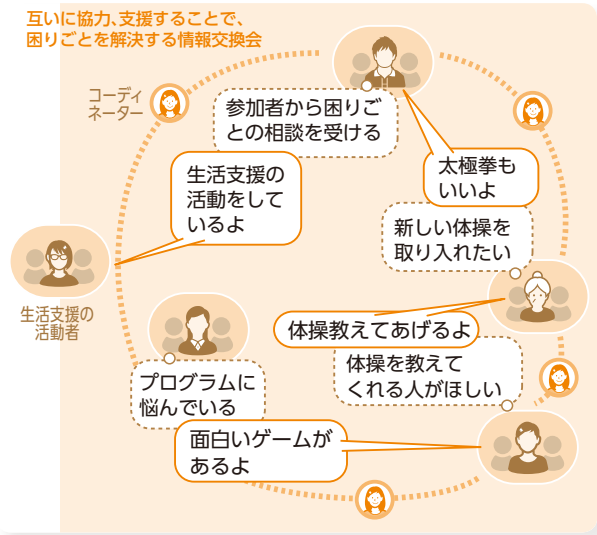
●課題やニーズが解消する情報交換会を目指して、開催通知にアンケートを同封し、参加者だけではなく欠席者の意見も集めた。

●アンケートで把握した意見を基に、課題やニーズの解決につながる「学び」を提供する情報交換会と「意見交換」を行う情報交換会を１回ずつ開催することにした。

●また、課題解決につながるよう、居場所等の運営者以外に生活支援の活動者等に参加を促し、様々な立場の参加者が気軽に意見交換できることを目指した。

●大勢集まったことで、参加者が互いに困りごとの相談や、助言し合う関係性ができた。

●次第に、参加者たちは自分ができることを提案し合う、協力し合う、支援し合うことで困りごとを解決するようになった。



取組のポイント

その1 共通する課題やニーズを持つ運営者を活動の垣根を越えて集める。

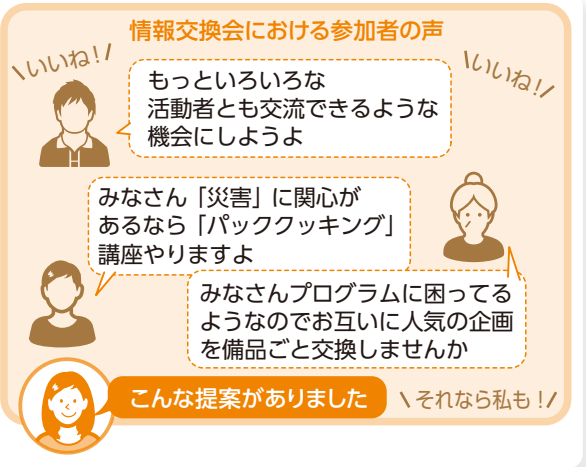
その2 事前アンケートを通じて、運営者の困りごとや共有したいこと等の意見を集める。

その3 運営者同士が互いに協力、支援し合う関係性をつくる。

年・月	出来事
平成24年度～	地域福祉推進委員会において、地域と協働して居場所の取組を開始。
平成27年度～	居場所の運営者を孤立させないため、地域福祉推進委員会の「居場所の交流会」を開催。（年２回実施）
平成28年５月	地域支え合い活動創出事業開始。
7月	地域支え合い活動創出事業の「高齢者の居場所の情報交換会」を実施。
9月	地域福祉推進委員会の「居場所の交流会」を実施。
12月	地域支え合い活動創出事業の「高齢者の居場所の情報交換会」を実施。
平成29年度～	２つの情報交換会を統合。（対象者を広げて、年２回開催することにした。）

取組の展開

- 回を重ねることで、様々な団体が「地域住民の孤立をなくそう」という共通の思いを大切に活動していることがわかり、互いを励みに日頃の活動を行うようになっていった。
- この参加者間のつながりを地域の運営者全体に広めるため、課題に対する情報提供や意見交換の内容だけではなく、各団体の活動内容も居場所等の運営者に発信した。
- 各団体の活動内容を情報発信したことで、情報交換会の場以外での交流がうまれ、居場所だけではなく、公園体操等も含めた地域の運営者全体で互いに課題の解決ができるネットワークができた。



活動の垣根を越えて、運営者が集まる情報交換会。たくさん集まると、誰かが課題の解決方法を知っている。

紹介されたゲームをみんなで体験。
楽しい情報交換会が参加者のつながりを強くする。

災害への備えとして「パッククッキング」講座を開催。参加者から、役に立つアイデアを共有したいと声が上った。

担当コーディネーターのコメントと今後の展開

情報交換会の開催に加えて、地域の運営者全体で活動内容を共有することで、団体間の交流が活発になりました。情報交換会で顔の見える関係となった運営者同士が個別に交流を続けたり、共有した活動内容を活用して新たにつながったりすることで、地域全体の大きなネットワークが生まれたと感じています。

「地域住民の孤立をなくそう」というみんなの思いを実現するため、今後も、このネットワークを活かして、気になる人に参加を促す方法や担い手の確保といった課題をみんなで解決していけるよう、支援していきます。

12

コーディネーターの
取組事例

高齢者の生活支援ニーズに関するアンケート調査

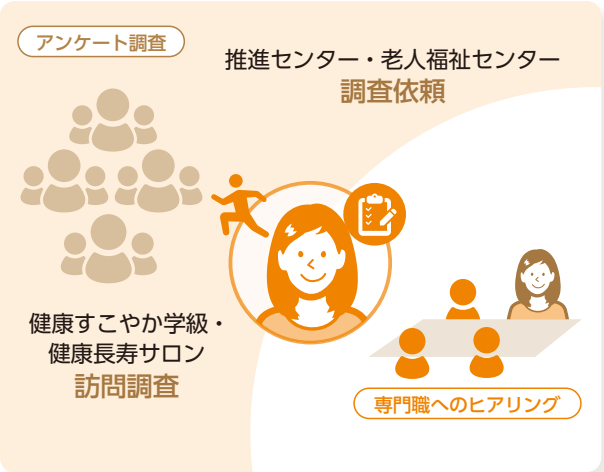
生活支援ニーズや居場所活性化に必要な要素、近隣の助け合い活動の現状を把握・分析。

きっかけ（課題になっていたこと等）

- 生活支援サービス創出の企画や支援の基礎資料となるものがなく、高齢者の生活支援ニーズの明確化や、支え合い活動の現状を把握する必要があった。
- 連絡会議や実務者会議等でアンケート調査の実施に向けて協議することになった。
- また、居場所の情報交換会の実施によりネットワークをつくった高齢者居場所運営者等に対して、居場所運営の活性化に役立つ情報を提供することを目指した。

コーディネーターの動き

- 推進センターや老人福祉センターが開催する介護予防教室や、健康すこやか学級、健康長寿サロン等の参加者に対してアンケート調査を実施した。
- 上記アンケート調査に加えて、地域包括、推進センターの専門職に対して、日々の活動で把握している生活支援ニーズや、支え合い活動の広がりに必要な条件等をヒアリングし、専門職の視点を調査の分析に取り入れた。
- 生活支援ニーズアンケート調査や関係機関へのヒアリングをもとに、調査結果を分析し、連絡会議において調査報告を行った。



取組のポイント

その1 高齢者の日常生活における生活支援ニーズを把握する。

その2 高齢者を対象とした居場所の活性化に必要な要素を分析する。

その3 主に近隣での支え合い活動の現状を把握・分析し、今後の取組への活用につなげる。

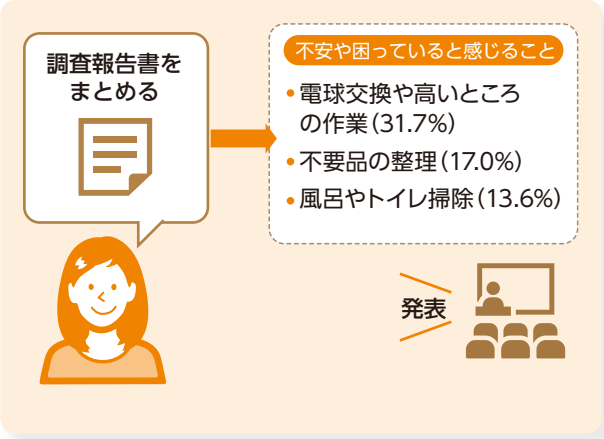
年・月	出来事
平成29年6月	連絡会議・実務者会議でアンケート調査の実施に向けた協議。
8月～11月	生活支援ニーズアンケート調査の実施。
12月	地域包括・推進センターの専門職へのヒアリング。
30年2・3月	連絡会議・実務者会議でアンケート調査結果の報告。

取組の展開

●調査報告をまとめる中で、高齢者が不安や困っていると感じることが明らかになった。特徴的な結果として、男性や女性の居場所に期待することや、年齢層の違いによって「おすそ分け」や「ゴミ出し」等、近隣の方にしていること・できることに違いが見られた。

●連絡会議で調査結果を報告し、関係機関と実態を共有したところ、調査結果に関連する「高齢者からよく耳にする外出先」や「支え合い活動の推進に必要なこと」等の意見交換につながった。

●アンケートや意見交換等で把握しゴミ出しや買い物等の生活支援サービス創出に向けて、地域と調整を図ることとした。



単位：%

居場所・サロンに参加しやすい条件		自宅から近い	おしゃべりが楽しめる	交通の便が良い	食事やお茶がある	参加料が無料・低い
全体		75.7	41.7	37.2	33.6	30.9
男性	60代	59.3	22.2	22.2	25.9	33.3
	70代	69.4	25.8	27.4	30.6	33.9
	80代～	66.7	27.6	31.0	20.7	34.5
女性	60代	78.0	30.1	30.1	26.0	35.8
	70代	80.7	43.1	40.0	34.8	39.4
	80代～	77.0	51.5	40.4	47.4	33.1

男性は「おしゃべり」「交通の便」を重視していない

80代女性は「おしゃべり」「食事・お茶」での交流を希望

単位：%

近隣の方等にしていること・できること		声かけ	世間話	サロンへの誘い	おすそ分け	サロン準備等	ゴミ分別ゴミ出し
全体		52.9	39.2	36.1	20.5	15.9	13.9
男性	60代	55.6	25.9	14.8	3.7	29.6	7.4
	70代	43.5	29.0	21.0	4.8	17.7	27.4
	80代～	49.4	29.9	18.4	10.3	17.2	24.1
女性	60代	53.7	30.1	33.3	19.5	28.5	13.8
	70代	57.1	42.7	36.8	25.2	19.3	10.9
	80代～	50.2	42.1	42.8	21.3	7.9	13.6

「世間話、サロンへの誘い、おすそ分け」

70～80代「ゴミ分別・ゴミ出し」

60代「サロン準備・片付け」

担当コーディネーターのコメントと今後の展開

高齢者1,339名の方にアンケート調査に御協力いただき、日常生活上のちょっとした困りごとや支え合い活動の実態について、把握することができました。

このアンケート調査の結果は、基礎資料として、ゴミ出しや買い物等の生活支援サービス創出の企画や支援に活用していきたいと思っています。

京都市地域支え合い活動創出事業

地域支え合い活動創出コーディネーター 支援事例集

京都市保健福祉局　健康長寿のまち・京都推進室　健康長寿企画課
〒604-8101
京都府京都市中京区柳馬場通御池下る八幡町65
京都朝日ビル4階
TEL:075-746-7734　FAX:075-251-1114

社会福祉法人 京都市社会福祉協議会
〒600-8127
京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83-1
ひと・まち交流館京都3階
TEL:075-354-8732　FAX:075-354-8738

京都市
CITY OF KYOTO
京都市はSDGsを支援しています。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
2030年に向けて
世界が合意した
「持続可能な開発目標」です

まちぐるみ みんなで健康 いきいき京都
健康長寿のまち・京都

発行　平成31年３月
京都市印刷物第303245号